

壱岐と斑鳩宮



■前児島（壱岐大島） 569.88km - 若草伽藍金堂跡・塔心礎石 - 大沼浮島 569.88km
前児島

不明。

大島神社/湍津姫命・田心姫命・市杵島姫命 大島は渡良三島の一つ 壱岐市郷ノ浦町大島 696 番地



若草伽藍金堂跡・塔心礎石（法隆寺）

寺伝によれば 607 年（推古天皇 15 年）に聖徳太子が斑鳩宮の傍に建立したとされる創建法隆寺の跡。日本書紀に 670 年に焼失した記述。1939 年の 12 月から本格的な発掘調査が実施され、若草伽藍の配置は塔と金堂が南北一直線に並ぶ四天王寺式であることが分かった。塔の基壇は一辺 51 尺（15.5 m）、金堂跡は間口 72 尺（21.8 m）、奥行き 64 尺（19.4 m）の大きさだった。さらに、若草伽藍は法隆寺西院伽藍の方位を示さず、磁北が 20 度西に振れていることも判明した。この方位の違いが、長い間繰り返されてきた法隆寺の再建／非再建論争に終止符を打つことになった。奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺山内



備考

前児島は、大島神社の御前に浮かぶから前児島なのだと思う。もともとは大島神社の奥宮なのではないか。そして若草伽藍金堂は、北西向きに建てられていた。他のしくみの神社にも見受けられるが、壱岐と大沼浮島を両極にすればこの角度になるのだろう。斑鳩宮跡地も同じように傾いてある。

(参考)

■大島 雷崎 569.59km - 斑鳩宮跡地 - 大沼浮島 569.59km

※正確な大極殿跡地がわからないが、中心にあったとして調べてみた。

斑鳩宮跡地

聖徳太子が605年に宮居とした所。『日本書紀』によれば、聖徳太子は601年（推古9）2月に斑鳩の宮の造営に着手した。この新しい宮の造営には4年半もかかっている。20年間も住み慣れた上宮（かみつみや）を離れて一族ともども斑鳩の宮に移ったのは、605年（推古13）10月である。そして622年（推古30）2月22、49才で逝去するまで17年間をその宮で過ごした。聖徳太子の薨去後、斑鳩の宮は長男の山背大兄（やましろのおおえ）皇子に伝領された。それから21年後、宮は上宮王家滅亡の舞台となる。

643年（皇極2）11月、蘇我入鹿（そがのいるか）は、巨勢徳太（こせのとこだ）と土師娑婆（はじのさば）に命じて斑鳩の宮を急襲させた。山背大兄王らは数十人の側近者と防戦したが、勝算のないのを悟ると、馬の骨を寝殿に投げ込み生駒山中に逃れた。巨勢徳太は宮に焼き払い、灰の中から骨を見つける山背大兄は死んだ思い、囲いを解いて退去した。皇子たちは5日ほど生駒山中に隠れていたが、山から出て斑鳩寺に入ると、そこで自決して果てた。『上宮聖徳法王帝説』によれば、このとき山背大兄王と子女および同母弟とその子女合わせて15人が亡くなったという。

宮の方位は、磁北が20度西に振れていて、若草伽藍と同じ方位にある。

奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺山内



大島雷崎

不明。 壱岐市郷ノ浦町大島

備考

神社にはつながらなかったが、雷崎というところにぶつかった。写真で見ると磐座信仰らしい御崎の形をしている。なにかここで祭りをする風習がないか調べてみたい。斑鳩宮とともに無くされた聖地なのではないか。斑鳩宮も、大沼浮島と壱岐の両極を意識した北西向きに造られている。



備考

山形の出羽三山を開いた蜂子皇子（崇峻天皇の子）は、蘇我馬子の暗殺から逃れるべく聖徳太子によって匿われ宮中を脱出して山形の八乙女浦にたどりつき、三本足の鳥に導かれて、羽黒山に登り羽黒権現を感得した歴史がある。大沼浮島や朝日岳を信仰する聖徳太子系の一族がすでに山形にいて擁護したのではないだろうか。

大友皇子は、若草伽藍法隆寺が焼失した671年に太政大臣になり、その年の12月に父の天智天皇が崩御し、翌672年に39代弘文天皇となっている。さらに同年の壬申の乱により自害した。翌673年に首謀者だった大海人皇子が天武天皇に即位した。聖徳太子の作ったしくみを必要としない大海人皇子が法隆寺に火をつけ天智天皇を暗殺したと考えられるのではないか。そして奈良時代が始まった。